

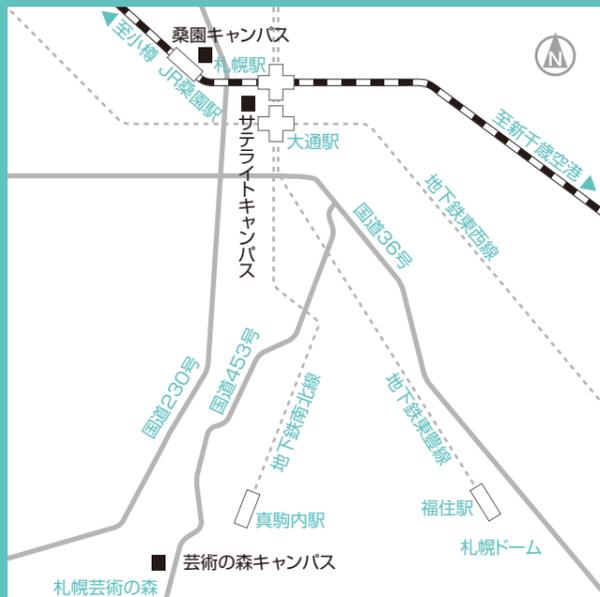
研究フィールド

本研究は全国で5番目の人口を有する北海道最大の都市、札幌市を中心に、有珠郡壮瞥町、道南地域、青森県、高知県など、幅広い地域にて研究教育活動を実施してまいりました。

本研究の最終年度である平成30年度は、これまでの実績をもとに、札幌市立大学デザイン学部芸術の森キャンパスを拠点に、成果のまとめ、社会還元への準備を行ないました。



- [1] 札幌市
- [2] 有珠郡 壮瞥町
- [3] 函館市
- [4] 北斗市
- [5] 木古内町
- [6] 五所川原市
- [7] 青森市
- [8] 高知県
- [9] 四万十町



札幌市内



芸術の森キャンパス

成果報告
WebSite



<http://kakiyama.info/research/kaken/2018/acp/>



日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(A) 研究課題番号:16H01803

「拡張キャンパス型地域連携」による 過疎市町村の自律的創生デザイン研究

研究代表者: 蓮見孝 (札幌市立大学 デザイン学部 特任教授)

2018 report

研究概要

本研究は、大学の機能や効用を活かした「拡張キャンパス型地域連携プログラム(以下ACPと略記)」により、大都市の持つ資源やパワーを周辺過疎市町村に効果的に適用させるしくみづくりをめざすものです。周辺過疎市町村の自律的な活性化を促し、同時に大学における教育効果を高めるためには、どのような課題を解決し、どのようなプロセスを経るべきかを、ACPの実証実験により解明します。

研究対象フィールドは北海道地域とし、大都市として札幌市、周辺過疎市町村として有珠郡社管町を取り上げます。具体的には札幌市内に立地する札幌市立大学とその連携関係にある大学、そして社管町とその周辺市町の住民や産業界の連携によるACPの運用を通して、若年層を中心とした連携地域間の人的交流の促進、地域産業の活性化、住民のウェルネス向上を図ります。

本研究で得られる成果は、札幌市立大学がめざす「地域創生デザイン学」の方法論の確立と体系化に活かします。

概要 outline

本研究の成果の社会還元を目的とした、教育プログラム化／学問体系化を、書籍の出版を想定した「書籍のコンセプト設計」「執筆活動」にて実施

研究の歩み

1年目(平成28年度 成果概要)

研究計画に基づき
授業型学び
PBL型学び
WS型学び(国内WS) を実施
 加えて
FW型学び を実施

2年目(平成29年度 成果概要)

平成28年度の成果をもとに
WS型学び(国際WS)
 ・【**サイトシーング型**】
 ・【**ツーリズム型**】
 ・【**アートプロジェクト型**】 を実施
 加えて
FW型学び を実施

3年目(平成30年度 成果概要)

平成28、29年度の成果をもとに
教育プログラム化／学問体系化 を
書籍出版を想定した執筆活動
 の形式で実施

平成30年度の歩み

5月	10日：第1回運営会議	【出版計画検討・編集委員会発足】
	23日：編集会議①	【企画検討・類書リサーチ】
	30日：編集会議②	【コンテンツ洗い出し】
6月	6日：編集会議③	【構成(章立て)検討1】
	13日：編集会議④	【構成(章立て)検討2】
	20日：編集会議⑤	【構成案作成】
7月	5日：第2回運営会議	【書籍構成案承認・執筆開始】
8月	執筆期間	
9月	執筆期間	
10月	3日：第3回運営会議	【執筆進捗状況共有】
	原稿整理・校正	
	15日：第4回運営会議	【科研申請内容審議】
11月	30日：第2次原稿締切	
	完成原稿編集・提出用写しとりまとめ	
	18日：第5回運営会議	【校正方針確認】
12月	18日：第5回運営会議	【校正方針確認】
	22日：第6回運営会議	【ブックデザイナー決定】
1月	ブックデザイン担当学生公募	
2月	ブックデザイン検討	
3月	13日：第7回運営会議	【表紙・本文フォーマット検討】

出版の目的

地域創生を主体的・創造的に担う人材の育成

コンセプト

書籍を構成する要素を、授業のメタファーで構成する。
 (オムニバス形式で1コマを1教員が担当するイメージ)

構成する要素	授業メタファー
講師紹介／全体構成	オリエンテーション
理論編	講義
実践事例編	演習
手法編	実習

多様な地域創生に関わる専門性を有する大学教員の試みを、一般的な方法論に落とし込む。

想定する読者

- 地方自治体のまちづくりを担当する行政職員
- まちづくりの現場で中核となる地域住民
- 地域を元気にする(中小)企業
- まちづくりを学ぶ学生

どうやって大学に
 依頼すればいいの？

デザインやアートで
 まち育てって
 どういうこと？



地域創生デザイン論

“まち育て”に大学力をどう活かすか

札幌市立大学 地域創生デザイン研究チーム 編

教育プログラム化

客観化

学生の力

アクティブ
ラーニング

大学を活用するメリット

大規模
アクティブ
ラーニング

デザインの力
アートの力

書籍として編纂

第1部 社会背景編

はじめに
 第1章 少子高齢社会のミライ

蓮見孝
 原俊彦

第2部 事例編

第2章 風のはんや 協奏のレストラン
 第3章 風ぐるまアートプロジェクト
 第4章 炭鉱(やま)の記憶アートプロジェクト
 第5章 環境アートによる風景とのつながり
 第6章 地域×大学で育むグリーンカーテン
 第7章 地域活性化の企画立案に学生が参加するメリット

片山めぐみ
 上田裕文
 上遠野敏
 山田良
 斉藤雅也
 石井雅博

第3部 計画・実践編

第8章 TSSその1-大学による地域創生の試み
 第9章 TSSその2-地域創生に活用可能なテクニック
 第10章 ACP理論編-拡張するキャンパス
 第11章 ACP実践編-楽しい体験エコプログラム

柿山浩一郎
 柿山浩一郎
 酒井正幸
 酒井正幸

第4部 分析・手法編

第12章 ACP分析編
 PART 1 効果的な学習形態の提案および実践的試行
 PART 2 自律的行動を促すワークショップ
 PART 3 カメラ付きGPSロガーによる地域ポテンシャルの把握
 第13章 大容量文書データのテキストマイニング分析

金秀敬
 矢久保空遥
 柿山浩一郎
 城間祥之

第5部 展望編

第14章 地(知)の拠点整備事業(COC)
 第15章 総論と展望

中原宏
 蓮見孝

* TSS : Time Space Sharing
 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(A) 研究課題番号:25242005
 タイム・スペースシェアリング型地域連携による地域創成デザイン研究

書籍の概要 2019年度の刊行を予定。内容は一部変更になる場合があります。

札幌市立大学は、2006年に開学した比較的新しい公立大学であり「人間重視を根幹とした人材の育成」「地域社会への積極的な貢献」を教育研究上の理念としてかかげ、多くの教員が学生と共に地域に入り、多様な活動を展開してきた。本刊行物は、札幌市立大学の取り組みを通して「地域創生」と「デザイン」をキーワードとし、地域主体による内発的な知力の発揮と自律的な発展を導く創生の可能性を追求したものである。構成は以下のとおりで、授業形式(1コマをひとりの教員が担当するオムニバス形式)のイメージである。

第1部「社会背景編」は、とかく負のイメージで捉えられがちな少子高齢社会をより冷静な目で捉え、各地で展開されている活動事例などを紹介しながら新たな調和生成の道筋について論じる。

第2部「事例編」は、大学の教員がナビゲータとなり学生や地域住民などと共に取り組んできた6つの活動事例紹介であり、「地域創生」には多様なアプローチとスタイルがあることを読者に伝える。

第3部「計画・実践編」は、札幌市立大学が文部科学省・日本学術振興会の補助を得て取り組んできた2つの研究プロジェクトの成果の報告である。

1つめとして、2013～2015年度の3年間で取り組んだ科学研究費補助金・基盤研究(A)「タイム・スペースシェアリング型地域連携による地域創成デザイン研究」の成果である。この研究は、過疎化が顕著な北海道の市町村(有珠郡社管町)と大都市(札幌市)を対象に、地域の魅力を生み出す「人・事・場・物」という4要素に着目しながら、両者の強みを活かし共生し合うしくみづくりを検討したものである。

2つめは、2016～2018年度の3年間で取り組んだ基盤研究(A)「拡張キャンパス型地域連携」による過疎市町村の自律的創生デザイン研究である。この研究は、大学を有さない地方自治体に、大学の効用を波及させようとするものであり、地域住民を対象とした教育の試みや、まちを魅せる協働プロジェクトの推進を通して、まちを地域住民と大学との学び合いのプラットフォームにするといった試みである。

第4部「分析・手法編」は、主に第3部で紹介した研究で活用した分析の方法やツールについて、具体的事例をもとに解説したものである。

第5部「展望編」は、2013～2017年度の5年間にわたり推進してきた文科省補助事業「地(知)の拠点整備事業」の報告である。この事業は「ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成『学び舎』事業」と称し、大学キャンパスを地域に開き、多様な社会的主体(ステークホルダー)と協働して、より高度な地域運営のかたちを描き出そうとした事業である。

以上のように札幌市立大学では、地域が自律的に高度な地域マネジメントを行えるような方法論やプログラムを開発すると共に、大学を活用した様々な地域創生デザインの取り組みを実践してきた。この実践経験は、大学と学生のみで活用すべきものではなく、地域でまちづくりを担当する行政職員や地域住民にとっても有効であると考え、大学活用の可能性についてわかりやすく解説を試みたものである。